

帯広畜産大学の講義

国際耕種では、これまでたびたび国内の大学・役場等で講義する機会をいただき、乾燥地を中心とした、海外における技術協力の知識・経験、国際協力における開発コンサルタントとしてのキャリア形成のしかた等を学生・一般市民らに伝える活動を行ってきた。近年では、帯広畜産大や日本獣医生命科学大での毎年定例の講義をしている。特に、帯広畜産大での招聘講義については2013年度に初めて講義したときから、毎年継続して実施しており、今年で10年目の節目をむかえた。

帯広畜産大の講義は、同大学とJICA帯広センターとが共同主催する、「国際農畜産論（2019年までは国際畜産論）」である。畜産科学専攻と獣医学専攻の学部2年生が対象で、講師のリレー方式による前期or後期の全12回講義で各国の農畜産事情が紹介される。国際耕種は、その1回分のコマを毎年担当し、モンゴル・パレスチナ・スーダンでの技術協力の過去事例のなかから家畜飼料資源に関係する現場活動を紹介している。さらに、民間の開発コンサルタントとしてODA（JICA）事業にかかわり、途上国での技術協力を展開・実施する立場やその意義・やりがい等を学生に率直に話すようにしている。

講義内容に簡単にふれると、まずパレスチナ事例では、イスラエルによる占領政策下でのさまざまな制約により、農家の劣悪で不利な営農状況を鑑みながら、いかに地域資源の利用に活路を見出していくか。農業残さ・家畜糞尿の利用を促進するため、当時の畜産分野で取り組んだサイレージ製造や堆肥化など「資源循環型」の適正技術開発の過程について紹介している。つぎにモンゴル事例では、冬営地・夏営地での水源確保・整備の重要性にふれつつ、「未利用・低利用」の草原管理や牧民の遊動を促していく工夫について紹介している。最後にスーダン事例では、アトバラ川東岸地区における貧困層牧民らを対象にした、飼料用ソルガム生産のための「集水技術（Water

Harvesting、以下 WH）」の技術選定と実際の導入経緯、またプロジェクト側による一方的なサービス提供の陥穽を避け、一定の費用負担を受益者に求めている際の考え方を紹介している。

この講義では、上記の3つのテーマに沿って、学生に講義後のレポートを課している。これらのテーマから講義をなぞってもいいし、自分なりに調べたり、勉強したりしたことでもいいし、実際に十勝地域で取り組んでいることでもよいので、選択したテーマについてA4半ページ～1ページ程度にまとめたレポートを提出してもらっている。そのテーマ選択の結果を分類・集計したものが下記に示す表であるが、学生の問題意識の所在や関心の方向性が読みとれる。乾燥のWH技術に一定の学生が興味を示すのもわれわれにとってはおもしろい点である。

年度別の各テーマの選択状況

年度	資源循環型	未利用・低利用	WH	小計/合計
2022	36 (65.5)	19 (34.5)	-	55 (100)
2021	23 (59.0)	16 (41.0)	-	39 (100)
2020	45 (61.6)	28 (38.4)	-	73 (100)
2019	56 (59.6)	14 (14.9)	24 (25.5)	94 (100)
2018	21 (46.7)	13 (28.9)	11 (24.4)	45 (100)
2017	23 (45.1)	15 (29.4)	24 (25.5)	51 (100)
2016	23 (54.8)	8 (19.0)	11 (24.4)	42 (100)
2015	28 (47.5)	14 (23.7)	13 (25.5)	59 (100)
2014	33 (50.0)	14 (21.2)	11 (26.2)	66 (100)
2013	42 (49.4)	20 (23.5)	17 (28.8)	85 (100)
小計/合計	330 (54.2)	161 (26.4)	19 (28.8)	609 (100)

講師と初対面となる教室内での質疑応答では、なかなかはずかしがって正面切って発言してこない学生も、レポート内では、国際協力への興味、専門・研究室の選択について、わりとしっかりした考えの記述があったりして頼もしく感じる。また、過去には、受講生のなかからインターンとして国際耕種にきてくれた学生も複数いる。将来の開発コンサルタント・NGO等として、日本や世界の農業支援の現場を担う人材が受講生からでてくることを期待しつつ、毎年、北の大地での講義交流を楽しみにしている。